

国際化時代と文章表現指導

金子 泰子

目次

- 一 時代の要請
 - 二 国際化の求めるもの
 - 1 国際化って何だろう
 - ① アンケート作文から
 - ② 留学生の作文から
 - 2 国際化をこうとらえる
 - 三 文章表現指導でなすべきこと
 - 1 表現意欲の喚起
 - 2 相対化意識の育成
 - 3 論理的思考力の育成
 - 四 日本語を見つめなおす姿勢を
 - 1 国語教育に日本語教育の視点を
 - 2 日本語は非論理的か
 - 3 日本語教育は日本人にとって国語教育そのものである
- ### 一 時代の要請

長野県の一地方都市、上田市でも、街角のいたるところで外国人を目にする。気づかずに通り過ぎる人も考慮するとかかなりの数に上

るだろう。

市内の私立大学に聴講生として在籍している中国からの留学生が、知人を日本に呼び寄せたいから推薦状を書いてくれないかとやってきた。数ヵ月前には、小中の女教師委員会で「国際化」に関する講演をと、国語教師の筆者に話が回ってきた。留学生を対象とする日本語教育に携わった経験(注1)が買われてのことだろうが、それにしても地方の一國語教師としては、世の中の動きを感じずにはられない。

世はまさに「国際化」の氾濫。国語の教師は日本人にその母語である日本語を教えるのが仕事であって、「国際化」などとは無縁であるとのんきに構えてはいられなくなった。「国際化」にまつわる事柄が生活の中でこれほど大きな意味を持つようになったのならば、日々の生活を支える日本語を教える国語教師こそが「国際化」への認識を明確にすべき時であろう。

「国際化」ということは、今どのように使われているだろうか。我々の思考を代弁することは正確にとらえることが必要だ。古田暁(注2)は「言語教育の場で、文化について教育することは、…欠かすことのできない作業である」と述べている。国際化時代の国語教師の役割は予想以上に大きいものである。

上田女子短大で筆者が担当する「国語」と「国文法」の授業に、初めて中国からの留学生が二人加わったのは五年前の一九八五年であった。日本語への彼女らの素朴な、そしてもつともな疑問は、指導者である筆者や学生達に、新鮮な刺激を与えた。「灯台もと暗し」、日頃何不自由なく使っている日本語を、外国人に説明することの難しさを学んだ。「国文法」受講生の「なんのために文法なんか勉強するのか。普通に日本語の読み書きができれば十分だ」という疑問は、二人の留学生が授業に加わることで吹っ飛んでしまった。日本語そのものに對する疑問に限らず、日本人のものの考え方や生活習慣などについての留学生の積極的な発言は、我々自身を見つめ直す多くの機会を与えてくれた。

自らを知るためには他を知らねばならない。「国際化」の辞書的意味を確認するだけのような安直なものではなく、現実に直面した事柄にたいして、一人一人が真摯な態度で立ち向かった上でこそ見えてくる日本語、そしてその過程での経験と学習の成果とを大切にしたい。

こうした学生への期待もさることながら、その中から「国際化」の核心を見つけたし、自らの研究課題である文章表現指導の中に取り入れるべきものを抽出したいと考える。

二 国際化の求めるもの

1 国際化って何だろう

① アンケート作文から

「国際化」の問題を考えるに当たって、普段、学生はどのようにこのことばを用いているかを明らかにしてみたい。各分野での専門家の定義を引用するよりも、学生を対象に行ったアンケート作文「国

際化って何だろう」(注3)を紹介したい。講演の参考資料にと思い立って行ったもので、事前に「国際化」に関する話は何もしていない。

学生作文例

長野駅前を歩いていると、外人をよくみる。しかしその中には言葉だけ異なる人がいる。いわゆるフィリピン人とか。僕はこの人たちに対して、なぜか偏見みたいなものを持ってしまふ。この偏見は、この人とは関わりたくないといったように拒絶してしまうものだ。国際化は違った文化を持った人に対して理解し認めることである、といった点から見ると僕の中では国際化していないということになる。回りの人はどうかかわらないが、僕は、まだまだだ。

近ごろ、私たちは英語を話したり、外国へ行くことを国際化だと考える。しかし、本当は互いの国の文化や風習などの違い、あるいは我々日本人とは違った考えなどを理解しようとする事なのではないだろうか。実は、これは高校時代に僕と同じクラスだった留学生が言った事である。もちろん彼女は、「我々日本人とは・・・」とは言わなかったが、ホームルームの時間に聞いたこの言葉は、なるほどと感心させられるものがあつた。国際化とはこれだ。

最近、国際化という言葉をよく耳にする。留学生の数も増えている。白人が留学してきたら友達になりたいと思うが、東南アジアの人々には、説明しにくい、自分達が上から見おろしているような感じだ。やはり一種の差別がある限り、本当の国

際化にはなっていないかと思う。僕には朝鮮人の親友がいるがまず話してみればそのうち親しくなり心の中から差別は自然と消えていくと思う。差別がなくなって初めて国際化がやってくると思う。

海外に行った時、その国の人々からみれば私は外人である。

人間には一人一人の人格がある。ホームステイをしたときにイギリスやオランダの文化を学ぶと共にいろんな人々の考え方や思想も学んだ。私は人間であるかぎりみな地球人であると考え。人間は助け合い、他人の善い所を見習う。国と国の間でも同じである。国レベルでなく人間レベルでつき合うことができるようになるのが国際化することだと考える。本当は地球化と言いたい。

二十歳前後の学生の柔軟な考え方がよく示されている。身近な経験を元にしての、自分なりの国際化論の一端が窺える。

学生の作文から見えてくる「国際化」には、国家間の利害にからむかけひきはなく、個人レベルで相手を知り理解しようとする純粹で知的な好奇心が強い。なんの構えもなく自然な形でおこなわれる経験の積み重ねが、確かな国際交流につながる。真の国際交流は人際（人と人との交流）、文際（文化と文化との交流）が基本であるといわれるゆえんである。

米軍基地のある町に育った学生は、小さい頃から日常的に接してきたアメリカ人に対して、何の違和感も無いと書いている。父親の海外赴任についてミャンマーに住んだ学生は、自然の豊かさやゆったりとした生活がすっかり気に入ったと言う。

作文から窺い知る限りでは、学生達の「国際化」に対する考え方

はかなりの射ているようである。英語が話せること、外国とくに先進諸国の物資や考え方をとりいれることと言った一面的なとらえかたしかない学生は少数で、大多数は幾分踏み込んだ考え方ができるようである。しかし、正直なところ、現実の生活での彼らの行動はわからない。

② 留学生の作文から

では、留学生の方は、日本人及び日本をどのようにみているだろうか。アンケート目的で書かれた作文ではないが、留学生通信「たけのこ」（注4）に、日本の感想として載せたものを紹介する。

留学生作文例

日本は一般的ポーランド人にとって非常に遠い国だし、めずらしい国である。日本とポーランドの文化、生活様式、ものの考え方は、ことごとく異なっているので、日本ではポーランド人を驚嘆させることが多い。

私にとって、ふたつの国の最大の相違は、食生活と男女関係である。

食生活に関しては、ポーランドでは日本と違って、じゃがいもとパンが主食である。米を食べる習慣はあまりない。米はデザートをつくるためによく使う。それから、ポーランド人は魚介類はあまり食べない。ポーランド人にとって食べられる魚の種類は少ないし、普通は、カトリック教のまづりに関係のある断食の時にだけ食べる。それで、ポーランド人はほとんど肉ばかり食べている。海でとれた素材はあまり使わないのである。ポーランド人からみれば、日本人は変なものをいっぱい食べている。例えば、海藻、くらげ、蛸、うなどである。

二番目の大きな違いは、男女関係である。ポーランドでは、

女の人は崇拝の対象であるのでレディー・ファーストの国である。女の人は力が弱くて微妙な人間として、男の人から深い尊敬を受けている。礼儀の正しい男性は、日常生活ではいつでもどこでも女性に対する敬意を表すことは当然のこととされている。挨拶をする時には、男性が女性の手の甲にキスをする。いつも女性を優先する。その上、バス、電車、車を降りるときは、男性が女性に手を差し出して手伝ってあげる。この種の原則はたくさんあるが、ほとんどだれもが守る。

しかし、日本の文化では、女の人に対する崇拝がまったく存在しない。日本の社会は男尊女卑の社会である。そんな訳で、日本の風土と習慣を知らないポーランド人にとって、日本の男性はちよつと無作法者のように見える。

私には、なんといっても、男女関係の違いは、すごくやっかいなことだと思われる。日本の習慣に慣れるのは難しいし、やっぱり時間がかかる。しかし、もしもこの事態を逆にしたら、日本人の男性からみれば、女の人に対するポーランド人の男性の振る舞い方は非常におかしく見えるのかもしれない。

ポーランド

日本にきて三ヶ月、私の日本人観

日本に関する問題を考えると、いろいろな思いが頭に浮かんでくる。人間というものをまとめて、定義することはもちろん難しいとは思いますが、具体的に、正確に日本人について述べることはもつと難しいと思う。

日本にきて3ヶ月が経っている間に日本人も自分の民族と同じようにいろいろなタイプの人がいるのがわかってきた。しか

し、このたくさんの方々の個性の違う日本民族の中に、一定のルールを守って行動する共通性がみられる。

このルールは人と人が接触するときには存在し、はがきの書き方にもあり、さらに靴の並べ方にもあるのではないかと思う。このルールがすでに存在するために、このルールを守りさえすれば、人と人の関係は円満に保つことができ、人に失礼することなく、不安もうすくなったたりして、便利だと言えるが、一方、このルールがすでにある故に、かえって面倒で、動きにくい面もあるかもしれない。

例えば、人に感謝の意を表す場合、中国人は心をこめて、その時、その場で謝辞をいうが、それほど重大な恩恵にめぐまれたというのではない場合は、あまり、手紙で再びお礼のことばを書くような傾向はない。日本人の場合は、手紙や電話などを使って、もう一度感謝の気持ちを表す習慣があると思う。そうしないと、礼儀正しくないとと思われる恐れがあるようだ。

もし、そのルールが消えて、日本人が自分の好き嫌いににより、自由に行動するようになれば、日本人の堅固な団体性や、繊細な思想行動も次第に失われるのではないかと思われるが、一方、そうなれば、日本人は自分達と違う行動をする人々をもつと受け入れやすい、国際化した国民になるだろう。

台湾

日本にきて九ヶ月、私の日本人観

来日してから、日本人と友達になるために努力してきた。ドイツの人々は友情というものを大切にしているからである。誰にも話せないことや心の奥の深い感動についても、親友となら相談することができる。個人的な問題の場合にも親友ならよく

理解してもらおうことがある。しかし、日本人のお互いの関係は全く違う。自分のことや気持ちには恥ずかしくてあまり伝えない。感情を表現することも遠慮している。

日本人の個人的なつながりは弱い、グループ内でのつながりは強い。グループのメンバーとしてなら安心できるようだ。個人的な発議はあまり起こさないし、責任を自覚している人も少ない。よく先輩の助言を頼む。一方では、それはいい習慣だと思う。が、もし、先輩が悪いことをした場合、先輩から批判を受けることはあまりない。だから、先輩もよく先輩の間違いを繰り返す。リクルート事件を見ると、上に述べたことはすぐ分かると思う。

もちろん、特に悪いことをしていない人々も多い。しかし、無視している人が多過ぎると思う。子供の時のこのような態度はまだ許せるが、大人に対してそれは絶対に許されないことだと思う。「日本人は成人になりたがらない」そのような感じを受ける。

滞在中に、日本人の親友ができなかったことと、自分に直接関係ないことに対しては無責任で、あまり関心を寄せない（中国の事件についての日本の政府の対応など）ということが分かって、私はたいへん失望した。

西ドイツ

来日して一年三ヶ月、私の日本人観

初めての外国生活で、最初、特に困ったのは、歩道と車道の方角がブラジルとは違うことと、東京での地下鉄の乗り降りが難しいことでした。しかし、一年三ヶ月経ち、少しずつ日本人の習慣や性格や考え方が分かるようになりました。

日本での生活で、なんといっても難しいのは人間関係だと思います。なぜかと言うと、すべての日本人は恥ずかしがり屋で、外国人に出会うと自分から声をかけません。逆に、広大な国に住んでいるブラジル人は明るくて、オープンな国民性で、すぐ多くの人々と知り合いになります。普段もゆったりとした生活で、職場の人間関係にも難しい上下の区別はありません。そして、一週間の仕事が終わると、「良い週末をお過ごし下さい」と声を掛け、月曜日になると「週末に何をしましたか」と聞くことが普通です。すべてのブラジル人は週末を楽しみに待ちます。が、一般の日本人の人生は働くことだけのようです。ブラブラすることにはあまり慣れていないせいか。休みの時、何をすればよいか、落着かないようです。

また、目上を尊敬するという習慣で苦勞しました。日本のレストランでアルバイトをし始めた時、お客様がいらつしやると「いらつしやいませ」と大声で言わなければなりません。最初は口からすぐには出ませんでした。何日間か経ってから、自然と言えるようになりました。

日本各地を見て歩いて、私なりに国による習慣の違いや考え方の違いを知りました。例えば、日本人は、直接に意見を言わず、それに対して、ブラジル人は自分の考えをはっきり言います。感情も顔に表します。日本人の親切さと礼儀正しさに感動したこともあります。

それぞれの違いを見ながら、良いことだけ受け入れて、悪いことは排除するのではなく、やはり、自分が嫌だと思ふこともある程度理解してゆく姿勢が大切だと思います。そうでないとい、他の国での生活は、ストレスがたまりやすいのではないでしょ

うか。

ブラジル

各人が各様の思いを述べていて興味深い。それぞれが、生まれ育った地で慣れ親しんだ文化や生活習慣との違いに当惑しながらも、日本での生活にどうかして適応しようとして方法をさぐっている。

2 国際化をこうとらえる

ここに例として取り上げたのはほんの一部にすぎないが、おおむね外国人の見る日本人のイメージとして共通に浮かび上がってくる要素の一つは、その団体性というものである。個人個人は、1で見たように何らかの考えを持ち合わせているのだが、公の場でそれを表にする事はない。公私の区別が非常に明確であるとも言える。「公」というのは本来「私」の集合体として存在するものでなければならぬ。しかし、日本での「公」は「私」の集合体としての「公」ではなく、「私」を押し殺した形で存在する別のもののようである。

留学生が日本人に感じる幼児性や物足りなさの背景には、公の場では自分の考えを発表（表現）しようと思わず、たとえしたとしても、非常に不慣れで要領の悪い日本人の姿がある。

外国生活の経験があるとか外国語が自由に話せるとかの問題以前に、一人として自立した個人であらねばならない。「自立」は、一人で立つというような表層的な意味をもつものではない。人間として社会の中で他の人々と共に、互いに助け合い、話し合いつつも、自らの進む道を自分で探り当てながら進むことのできる人のことである。人は人との交わり無しに成長することはない。そして、その交わりの最大の手段が、ことばである。ことばで自らを表現する力を学生に求めたい。ことばを駆使しつつ、互いのコミュニケーションをはかり、共に普遍の真実を追求するところにこそ、真の「国際

化」が実現する。

筆者が自らの国語教室からとらえた「国際人」の定義は「ことばで自らを正確に表現する努力をし、ことばでの闘いが実行できる人」である。

三 文章表現指導でなすべきこと

1 表現意欲の喚起

留学生を相手に日本語教育を行うときに、筆者がもつとも気を遣うのは、学習者の伝えようとする事を正確に聞き取る（読み取る）ということについてである。日本語の学習者は、自由に運用できる語彙も文型も母語話者に比べると絶対的に少ない上に、不慣れで時間もかかる。日本人同士のツーカーのやりとりはありえない。（もつとも、筆者はこの日本人同士のやりとり——ことばはわずかも、たとえ無くとも、わかりあえる——ということに対して大きな疑問を持っているが……）事実を一つずつ丹念に確認しながら話し手（書き手）の言おうとするところをくみ取らなければならない。このところで注意を怠ると、学習者の母語を育んだ国の文化や習慣との違いから、とてつもない誤解が生じる恐れがあるからである。

しかし、出身国により、多少の違いはあるにせよ、留学生に共通する学習言語への積極的な姿勢と好奇心、そして何よりその旺盛な表現意欲が日本語の学習を大きく促進させるものであることは否定のしようがない。指導者の立場で言えば、言語の学習にとってこれ以上の強力な見方はないといえるだろう。

国語教育の現場ではどうだろうか。学習者にとって日本語は母語である。一でも言及したように、日頃自由に操っている（と信じている）「日本語」の勉強などに何の必要感も持っていない。また、小

中高での国語の授業では、「日本語」そのものの勉強よりも、日本語で表現された作品を対象に、内容の解釈や鑑賞に学習の重点がある。他者の表現を理解する力はこれでつくと考えたとしても、では、日本語で自らの思いを他者に表現し理解させようとする力はどこで養成されるのだろうか。

積極的に自らを表現し、そして何よりもそれが他者によって受容される経験を積ませたい。表現したものが、受け手によって確実に認められる喜びを体感させたい。表現意欲を喚起するための最も効果的な方法は理解されることの喜びを知らせることである。

「何を書けばいいんですか」「こんなこと書いていいんですか」受け身の姿勢が強すぎて、自らを表現することの喜びなど思いもよらぬことのようにだ。ピアノを能くする学生がいる。スポーツに堪能な学生もいる。自他共に認める実力評価ができるせいであろう、「いちおう」と前置きすることはあっても、趣味や特技として躊躇無く挙げるができるのが誇らしげである。良き指導者を得て、自らの長所短所も正確に把握している。音楽会やスポーツ大会で、間違えるばかりに潑刺とした姿を見せていて驚くことがある。

ことばでの表現はどうだろう。授業中、一方的に説明を聞き、それを受けとめることには慣れている。しかし、質問を受けて自らの意見を発表する段となると、たちまちことばを無くしてしまふ。教師のことばや本で読んだことばを思いだそうと四苦八苦している。それが間違いであるとは限らないが、困るのは本人がそれを理解した上で表現しているとは思えない点だ。何よりそれは話し手本人のことばではない。とは言え、関連事項に思い当たる者は良いほうかもしれない。大多数の学生は「わかりません」でその場を切り抜けるようにする。「ちょっと考えて。正解を聞きたいのではなく、あなた

のいま考えていることを知りたいのだから」と質問事項を繰り返し、噛み砕くようにして言い直すことになるのが常である。

教室の中で使われていることばがどれほど形骸化したものになってしまっているかに驚かすにはいられない。ことばは自分を表現するためのものである。教師は、学習者のことばを教室内でもっと頻繁に取り上げる必要がある。ことばが表現の手段であると同時に、確実に理解されるものでもあるということを感じなければ、ことばはますます学習者から離れることになってしまふだろう。筆者が、例年短作文の授業で、まず、繰り返し行わなければならないことは、表現の主体者に主体者本人のことばを取り戻すことである。そのことのために、一人一人の作文を丹念に読み、認めることを繰り返す。他の学習者と共に表現の中で使われたことばの意味を確認し合う。意識的にことばを使う姿勢を育てたい。無意識から自信を育てることには無理がある。何気なく書いたものが誉められるよりも、意識的に注意を傾けて書いたものが認められれば、充実感と同時に喜びも大きい。そしてその繰り返し、以後の学習の足掛りになって行く。

表現意欲の喚起は、国語教育の現場でいち早く取り入れられるべき課題であるはずだ。不自由なく操れる母語でこそ最も効率よく達成できる課題であろうし、それはまた、外国語学習へのよりよい学習姿勢となって現れてくるはずである。

2 相対化意識の育成

もつとことばに注意を向けさせたい。自由に操っていると信じている自らの日本語の運用力がどれほど不正確なものであるかを自己確認させたい。主観での判断ではなく、客観的な評価能力が必要である。小中高と国語教育を受けてきた学生であるが、日本語で表現

されたもの（自分のもの、他人のものの含めて）を客観的に評価する方法を全くといってよいほど身に付けていない。「じょうずだ」「おもしろい」「何となく雰囲気が出ていい」「うまくまとまっている」というように、ただ、漠然と感想を述べることはするが、表現に即して、具体的に解説することができない。自らが表現する場合にも、何となく疑問や不安感を抱きながら、主観で書き連ねるだけで、どのように直せば良いかがわからない。何の基準もなく、どこをどのように見るかの視点も持たずに表現するのは辛い行為である。何事にも何らかの手だてが必要だ。日本人が日本語表現でのその手だてを学ぶところは国語の授業においてであるはずだ。

表現は理解無しには成立しえない。キャッチボールに例えられるゆえんである。相手に受けとめられたボールによって、自らの投げたボールを知る。自らが表現者になって、表現法の実験を経験すべきである。経験が確かな評価力につながる。

自ら発したことばが、受け手にどのようなイメージを喚起するかを知ることが、自覚的なことばの遣い手になるための重要な契機となる。ことばが、伝達という本来の機能を充分に発揮するためにも、ことばは正確に用いられなければならない。日頃からあいまいなことばの表現を繰り返していると、自己を正確にとらえることができないばかりか、問題点を見つけたし、それを解決する道順さえみつけれないことになってしまう。

国語教育は、教師から生徒への一方通行であってはならない。理解学習より表現学習を優先させたい。読解（理解）学習の成果を表現学習に役立たせると同時に、表現学習でのそれをこそ理解学習で運用できる力をつけたい。

鏡を見ずに身なりを整えることは難しい。他者の装いを真似たり

参考にしたたりすることはできても、それをどのように自分のものとして合わせるかは、やはり鏡に映し出して検討する必要がある。さらに、他者の目を通しての修正が、自分では気づかない側面に目を向けさせてくれる。自らの文章表現を読み手に評価してもらい、同時に他者のそれを評価するという経験を積み重ねたい。作品完成までの過程も重要だが、それがどのように理解され、評価されるかというところまでを、文章表現指導に組み込むならば、作文の時間は、今までよりも楽しみの多い時間になるはずである。自分がどのように受け取られているかを知るのは、誰にとっても大きな興味の対象である。

学習者のことばを受け取りそして投げ返す過程を設定する。指導者との一対一のやりとりだけでなく、他の学習者を組み込んだ形のものが見えたい。各々が、自分のことばとその表現に自信を得たところから自己の確立が始まる。他者と対等につき合うスタートラインにつける。積極的に自己表現が行える。

自己認定は、単に他者との同化によるものであってはならない。日本人の場合、その表現は、自己否定を内に持った他者との同化の形を取る場合が多い。そのようなものは、表現者を一時的、表層的に満足させ、その場に波風をたてずに過ぎさせる便法にはなっても、何の進歩にも発展にもつながらないものである。違いがあるから存在価値がある。違いを知ってこそ自己の認定が行える。自己の個性を知ると同時に、他者の個性を認める態度を持ちたい。

教師は、自己を表現できる者であることは当然ながら、学習者の個性を正しくみとめる力が欲しい。教師の正当な評価能力が学習者自身の確かな評価能力につながっていく。

こまめに丹念に、文章表現から一人一人の良さを引き出していく。

誰にでもほめるところはある。学習者の作文が手元にあるというのは、教師にとって大きな財産である。つかいみちを誤らなければさまざまに利用できる。小さな間違いの指摘や内容面での批判は極力避けて、たとえ一字でも一句でも、それを取り出して良さを伝えたい。ことばに心を寄せる。指導者も、学習者も。表現と理解とを一体にした文章表現指導でありたい。

短作文(注5)を用いての指導例

私の楽しみ

T・T

上田女子短期大学に入学してやっと二週間。十八年間生きてきた中で一番長い二週間だったような気がします。それは、私は下宿生活をしているからです。今まで家の手伝いもろくにしなかった私ですから、毎日の食事、洗濯、その他疲れる事だらけです。そんな私の今一番の楽しみは、電話で家族の声を聞く事。五分話ただけで一日の疲れが体中からスウーとぬけていきます。連休には帰りたいと思っています。今からとても楽しみです。

小さな自慢

M・T

「絶対に泣くもんか」と思った。家族と離れ離れになろうとする時、父が悲しそうにうつむき、母は目に涙をため、妹は寂しそうに笑っていた。私は・・・皆が見えなくなっていた。父が私を車で下宿まで送ってくれた。私の涙は、もうなくなっていた。片付けをした後、父がビールを飲み、「帰るから」と小さな声で言った。また涙が出た。電話で声を聞いた。また寂しくなった。私の小さな自慢とは、家族とこの涙ではないだろうか。

小さな自慢

U・T

本当なら口に出さないといるところが自慢だと思いますが、

他に思いあたることはありませんので書いてしまおうと思います。私の家のおじいさんは糖尿病で一日に朝と夜の二回も薬を注射しなければなりません。注射器と薬を病院からもらってき、注射器の中に薬を入れておくのが私の日課になっています。誰も注射器なんてと嫌っていますが、私は看護婦さんになった気分で、寧ろ珍しい経験ができて、ささやかな誇りだと思っています。

初めての授業で、タイトル(私の楽しみ・小さな自慢)だけ与えて自由に書かせた作文である。書き慣れない学生の書く事への抵抗感を極力少なくするように、タイトルを工夫すると同時に、短作文(二百字)にしている。提出された作品は、資料化して、学習者の目にふれるようにする。書いて提出して終わりにするのではなく、作文を大事に教材として利用する。

初回の作文で指導できる事柄には、文体(常体・敬体)の統一、タイトル(課題作文の場合は副題の付け方)や書き出し文の工夫などがある。指導者は手元の作品の中から具体例を上げながら、学習者に分かりやすくポイントを押さえた指導を行いたい。書き手に届く指導を心がけたい。

上例の作品を元に筆者が行った初回の指摘は次のようなものである。

T・Tさんの作品、二カ所の体言止めがアクセントになっていてリズム感がでていますね。

M・Tさんの作品、短文の積み重ねでその場の状況が簡潔によく描けています。

U・Tさんの作品、何事も考えよう、発想の転換で嫌なことでも誇りにできますね。

誉めるときは名前を公表したい。他の誰でもない、本人だからこそ書けた作品全体の流れの中で生きることばの表現を一例毎に確認し合うことが大事だ。

短文で繰り返し繰り返し練習を重ねながら、いままで無意識に用いてきたことばを、読み手の理解を確認しながら本当の意味で自分の表現語彙として定着させる。文章表現は、ことばを媒体にして表現内容を対象化するものである。書き手はその場合の主体者である。それはとりもなおさず、自らを対象化することにもつながる。書くことは考えることである。そしてそれは、自らを見つめ、自らを知ることにつながっていく。

3 論理的思考力をつける

論理の力は世界共通であるはずだ。それなくしては世界の平和は存続しない。言語の違い、文化・習慣の違いを補い得るものが論理的な思考力である。

単語や文を、受け手の立場を考慮にいれて正確に使いこなせるようになったら、次はそれらを組み合わせて筋道の通った文章に仕上げるのである。主題に合わせて、有機的に統一された文章を組み立てるためには、充分に構想を練らなければならない。

構想の力は思考の力そのものである。(注6)自らの思いをいかに効果的に表現するか。一人合点や偏見から脱却して、説得力のある文章を構成するために、多角的に物事を考えることが必要である。構想指導に関しては注6に示す拙論で詳しく述べたのでここで繰り返すことはしないが、学習者の思考力の育成に、構想指導はもっとも大きな力を発揮するものであると確信する。

立場や考え方の違う外国人とのコミュニケーションは、論理的な思考力の育成に大きな力を持っている。国内での日本語話者同士に

よるそれと異なり、相対意識が最大限に強化されるからである。自らの思いを受け手を考慮にいれてひとたび対象化したうえで、文章を構成する。上手、下手は次の段階の問題で、相手に分かせようとする態度が、論理的思考力を飛躍させる。

乏しい経験からではあるが、指導した留学生の場合を考えてみると、初等教育レベルから、レポートを書く訓練、あるいは口頭で他人に説明したり、他人を納得させる訓練をうけているとみられる欧米系の留学生の書いた文章は、小さな誤り(漢字や文法上の間違い)は多くとも、文章全体としての要旨は非常に明快で、理解しやすいものが多い。何より、事実と意見とがはっきりと区別できるというのも、欧米系の学習者にきわだった特徴である。

主観と客観の違いを区別し、意見は具体例で確実に裏付けしながら論述してゆく力を日本人学生に付けたい。客観的な事実に基づいてこそ明快な論理が構成される。

世界的視野に立つ表現者を育てるためにも、論理的思考力の育成は、国語教育が、早急に、取り組まなければならない課題である。そしてそれは、文章表現指導においてこそ、最も効果的に行えるものである。

四 日本語を見つめ直す姿勢を

1 国語教育に日本語教育の視点を

日本の若者たちは、自分のことばを良くしたい、美しくしたいと思っている。しかし、どこがどう悪くて、どこをどう直せば良いかわからなくて悩んでいる。「最近の若者のことば使いは乱れている」と大人たちが言うから(調査結果によると、若い層の方が「日本語の乱れ」を言うものが多いそうだが。(注7))、漠然とそうだろ

うと思いこんでいるだけで、自分で判断するほど日本語について考えたこともなければ、知識もない。だからこそ不安も大きいのだらう。

もっと日本語に注意を向けよう。外国語を学ぶときの要領で日本語に向かってみると、いままで気づかずに来た日本語が見えてくる。留学生の何気ない質問が、無意識に日本語を使っている我々日本人に、日本語を見つめる良い機会を与えてくれる。ほんの一例を上げてみよう。

留学生の疑問・質問例

- ・「ああ、おいしかった」の「た」は過去ですか？
- ・鐘の音（おと）と鐘の音（ね）とはどう違うのでしょうか？
- ・「玄関で集まる」と「玄関に集まる」の「で」と「に」の違いを教えてください。
- ・「けっこうです」はOKかNOか、どちらかわかりません。
- ・「こんにちは」と言ったただけなのに「日本語お上手ですね」と言われます。子供扱いされているようで不愉快です。

2 日本語は非論理的か

日本語が論理的でないとする考え方は的外れである。論理の無いところに、文明や文化が発展する訳がない。このことについてはすでに多くの国語学者が論じているので問題ではないが、普段、日本語について深く考えたり、研究したりしない人の方が「日本語はいまいで非論理的なことばである」というようなことを声高にしゃべる。

日本語の特徴をその長所も短所も含めて、正確に学ぶ必要がある。この点は、指導者側に課せられるべき課題といえよう。それも、学者の考えをまるごとなぞり、教室でそのまま紹介するような姿勢は

許されるべきではない。学習者と共に、身近なことばの疑問を一つずつ解決して行くことだ。誰もが自らの疑問としてことばに向かつて行くことに意義がある。

日頃の日本人の日本語の運用に、非論理的な一面が認められるとするならば、それをしっかりと認識したうえでその改善を計らねばならない。日本語をよりよく知ることが先決問題である。

3 日本語教育は日本人にとっての国語教育そのものである

国語教室に、日本語以外の言語を母語とする学習者が存在することが当たり前になる時代がもうそこまで来ている。そしてそれは、国語教師にとっても日本人学習者にとっても、より深く日本語を考えることのできるすばらしい学習のチャンスでもある。

今後、日本語が世界の多くの人々に使われることによって、大きな活力を得、洗練されてゆくことが期待される。同時に、我々日本人一人一人がその自覚を持って日々の日本語に向かわねばならない。

注

（一九九一年一月一日）

- 1 金子泰子 1990・3 「信州大学文学部における日本語教育―日本語授業の実際―」信州大学人文学部人文科学論集第二十四号
- 2 吉田暁 1989・10 「ことばの教育と文化の教育―異文化コミュニケーション―」月刊言語 大修館書店
- 3 長野大学一般教育科目「国語」受講生百二十名
- 4 留学生通信「たけのこ」 留学生の作文の公表の場として、信州大学人文学部内で、一九八九年六月から一九九〇年二月にかけて発行した通信。教官および日本人学生からの寄稿も掲載し学部内での国際交流の一助となることを目的とした。注1参照

- 5 金子泰子 1988・3 「短期大学での文章表現指導―短作文(二百字字数制限作文指導の研究)―」 上田女子短期大学紀要十一号
金子泰子 1989・3 「短期大学での文章表現指導その2―短作文指導を通しての文章表現力の展開―」 上田女子短期大学紀要十二号
本文中の例文は、一九八九年度上田女子短期大学「国語」受講生の作文である。
 - 6 金子泰子 1990・3 「短期大学での文章表現指導その3―長作文(意見文)の構想指導で考える力をつける―」 上田女子短期大学紀要十三号
 - 7 稲垣吉彦 1981・9 「日本語の乱れ」論雑感」文学 岩波書店
- 参考文献
- ・1981・9・10△国語教育の課題Ⅰ・Ⅱ▽文学 岩波書店
 - ・真田信治 1989・10 「言語教育のイデオロギ―方言と学校教育―」月刊言語 大修館書店
 - ・浜本純逸 1990・7 「国際化時代の作文教育」 日本語学 明治書院
 - ・1987・8 「臨教審答申総集編」文部時報 臨時増刊号
 - ・矢野暢 1986 「国際化の意味」日本放送出版協会
 - ・濱口恵俊編 1989 「国際化と情報化」日本放送出版協会